

南国宮崎の風土は、私の原点である。

育った所は佐土原だが、生まれた所は油津である。佐土原の実家からは、夕焼けの中に霧島の高千穂の峰がよく見えた。牧歌的な風景の中に、どこか薩摩隼人の気性が残っていた。油津は、日南海岸の鵜戸神宮から南に下った漁港の町であり、母の故郷である。太平洋の広く伸びた海原は、いつ眺めても心が穏やかになる。

学校の美術教員であった伯父は、よく夏休みになると従兄たちと一緒に、油津から都井岬に行く途中の市木に写生旅行に連れて行ってくれた。市木の幸島^{こうしま}には、野生の猿が生息している。まだ小学生であった頃、幸島の猿が子猿を背中にのせて泳ぎ、海に潜るのを初めて見たときは、泳ぐのは人間だけではないのだと、変に納得したことを覚えている。当時、日南海岸の道路はまだ砂利道であり、自然の中に人が溶け込んでいた。いまでも幸島の風景とエメラルドグリーンの海の色は、

心の原風景



私の心の原風景になっている。

自然と人間が共存している豊かな故郷を脱出したのは、18歳の時であった。専修大学法学部に入学した当初は検事志望であったが、大学2年の夏、刑法理論の面白さに魅せられ、研究者になろうと決意した。「学若し成る無くんば死すとも還らず」という心境であったが、なぜか心の原風景がますます鮮明なものになっていった。刑法理論に夢中になり、食うや食わずの貧乏学生であったが、心の原風景はいつも温かく豊かであった。私の歩いた道は、曲がりくねったものではあったものの、自分の刑法学を構築する上では一筋の道であった。

不作為犯の研究をしていた大学院生の頃は、貧乏のどん底であったが、問題の解決を日夜考えていた生活は、困窮していても苦痛ではなかった。研究が楽しいのである。大学で教える頃には、生活できるようになったが、研究のスタイルが

変わった。研究しながら教育することが職務なのである。学生の清んだ目は、教壇に立っている教員の研究力を直観的に見抜いてしまう。研究に迫力がなければ、授業も面白くない。研究の面白さが学生の心を開くのである。ここでは、研究と教育の二足の草鞋を履かなければならない。さらに、学長職を務めることになること、三足の草鞋として、大学行政に携わることになる。その上、理事長職に就くと、大学運営の責任を負うことになる。学長職と理事長職を兼務することになると、まさに四足の草鞋である。

理事長職に就けば、研究どころではなく、大学運営に専念すべきであろう。しかし、研究する喜びを経験した者としては、いかなる境遇にあつても自分の研究を捨てる気にはなれない。人間を対象とする刑法学の研究は、一生続けなければ意味がないのである。私は、四足の草鞋を履いてきたが、研究は細々と続け、昨

日高 義博 ● 学校法人専修大学理事長

年、刑法理論の集大成として『刑法総論』（成文堂）をかううじて世に出した。さらに、私学で育った研究者としては、五足の草鞋を履かなければならないと思っている。つまり、一に自分の研究を構築し、二に建学の精神を背負って学生を教育し、三に学問の継承のために研究者を育て、四に母校を運営し、五に人としての生き方を示さなければならない。

五つ目の草鞋は実に難しいが、私としては、心の原風景を糧として歩いて来た自分の道程を自然体で示すしかない。今振り返ると、故郷宮崎の心の原風景がなかったら、一足の草鞋たりとも履くことができなかったと実感している。